

# 龍谷大大学院 臨床宗教師に11人認証

## 西日本初の養成 「修了証授与式」

心のケアを実践する宗教者「臨床宗教師」の養成を今年度から行っている龍谷大大学院は、京都市下京区の大宮学舎で1期生の修了証授与式を行い、大学院生11人が臨床宗教師として認証された。西日本で養成研修を実施したのは同大学院が初めて。平成27年度は社会人にも門戸を広げる。

龍谷大大学院は、先行して開講した東北大大学院と協力してカリキュラムを作成。昨年5月以降、東日本大震災の被災地や緩和ケアに取り組むあそかビハラ病院（城陽市）などで計110時間の実習を行い、傾聴や宗教間対話などの能力向上を図ってきた。

27年度は僧侶や神父など社会人の宗教者からも応募を受け付ける。レポートと面接で受講の可否を判定する。応募期間は2月2～16日。問い合わせは龍谷大文学部教務課（☎075・343・3317）。

臨床宗教師研修の修了証を受け取る  
研修生（左）

—京都市下京区の龍谷大



臨床宗教師 宗教や宗派の違いを超え、被災地や医療現場などで人の悲しみに寄り添う宗教者。布教や宗教勧誘は行わない。東日本大震災を機に東北大大学院が平成24年度に養成を始め、龍谷大大学院と鶴見大がこれに続いた。高野山大と種智院大も講座の開講を決めている。

## 「寄り添うつもりで傷つけている」「足下見て」

### シンポジウム 課題も指摘

死が間近に迫った患者とその家族、突然の災害で愛する人を奪われた人たち…。「グリーフ（悲嘆）ケア」を必要とする人々に、臨床宗教師が果たすべき役割は大きい。龍谷大大学院の修了証授与式ではシンポジウムも行われ、現場で活動する参加者からさまざまな課題が指摘された。

「寄り添っているつもりが、安易な言葉で相手を傷つけていることがある」。あそかビハラ病院で患者と家族に寄り添う僧侶、花岡尚樹さん（39）は講演でそう語った。

花岡さんは、医療チームの一員として活動する以上は最低限の医療知識が必要だとして「僧侶だから何かできるという考えは捨てるべきだ」と指摘。その上で「患者と接して得られる情報は一部分。相手の気持ちを想像し、変化を敏感に察知しなければならぬ」と述べた。

東北大大学院の谷山洋三准教授は、僧侶が寺院で信徒を相手に行う活動を「ホーム」、公共空間に出て多様な価値観を持つ人と接することを「アウェー」にたとえ、「まずホームをきちんとし、足下を見てほしい。芯があつて竹のように揺れることができる人こそ、臨床宗教師にふさわしい」と訴えた。

また、研修主任を務める龍谷大文学部の鍋島直樹教授は「一人一人が宗教的な死生観をバックボーンにしないと、傾聴する相手が不安になる」と指摘した。

修了した研修生の思いもさまざまだった。入江葉さん（28）は「傾聴の現場はだれのためにあるのか、自分は本当に相手の気持ちを分かろうと



臨床宗教師研修では、東日本大震災の犠牲者への追悼行脚も行われた—平成26年5月、宮城県石巻市（龍谷大大学院提供）

したのか。これからも実践を繰り返したい」。柱本尊さん（27）は「『私』に囚われすぎていたことに気づかされた。

福祉施設などの現場に入り、臨床宗教師として活動していきたい」と語った。

（小野木康雄）